

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25770105

研究課題名(和文) &lt;ゲルマニズム&gt;と19世紀イギリス小説隆盛の諸相

研究課題名(英文) Germanism and the Development of the 19th Century British Novels

研究代表者

市橋 孝道 (ICHIHASHI, Takamichi)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：70613397

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀中頃の英国に見られたドイツ文化の流入と再評価の動き<ゲルマニズム>を主に一般的な文化レベルで調査し、当時著しい発展を遂げていた英国小説への影響を解き明かしている。本研究は2つの段階から成り、第1段階ではW.M.サッカレーの主要小説内に言及されるドイツ関連の事物が当時の読者にいかなる形で異文化導入の機会となりえていたかを明らかにした。第2段階は18世紀末から19世紀初頭にかけて英国で流行したドイツ人劇作家コツェプーの翻案劇を調査し、英国人作家たちがこの翻案劇を酷評した様々な事情がいかにドイツ文化全般に対する不当な評価へとつながり、その後の再評価を引き起こしたのかを考察した。

研究成果の概要(英文)：This study elucidates how a noticeable trend to reassess German culture in the mid-19th century Britain has influenced the development of the British novels.

This research consists of two stages. The first examines how Thackeray adopted German things and thought into his major novels and played an important role as an usher to German culture for his countrymen. By thickly describing German materials, he not only contributed to the trend but also broadened novels' panorama into Anglo-German perspective.

The second reveals several causes of the underestimation for German literature in the early 19th century Britain, which had created the trend of the reassessment. Although the theatrical scene in the late Georgian period favorably received Kotzebue's plays adapted for the British stage, the local intellectuals bitterly criticized them and the phenomenon. Such criticism, however, was attributed to their limited understandings of the adaptation process as well as to the plays' problems.

研究分野：イギリス文学・文化

キーワード：イギリス文学・文化 イギリス小説・演劇 18世紀末 19世紀前・中期 ゲルマニズム ドイツ文学

1. 研究開始当初の背景

(1)1830年代から60年代頃まで、イギリスではドイツ文化が肯定的に評価され、積極的に受容される傾向が強まっていた。イギリス文学界における教養小説(Bildungsroman)の流入や教育界における幼児教育の理念と体制(Kindergarten)の導入はそうした傾向の顕著な事例である。これらの言葉は今や英語となり、その概念は世界中に普及している。

(2)こうした文化的潮流は18世紀後期よりイギリスにおいてドイツ文学が過小評価されていた反動の一つと考えられる。1774年に出版されたゲーテ(Goethe, 1749-1832)の『若きウェルテルの悩み(Die Leiden des jungen Werthers)』は、イギリスでも英訳版で高く評価されたが、その後コツェブー(Kotzebue, 1761-1819)原作の翻案劇が頻繁にイギリスで上演されるようになると、ドイツ文学はいつしか急進主義的な概念と結び付けられ、批判的に捉えられるようになった。しかし、1827年にカーライル(Carlyle, 1795-1881)が「ドイツ文学の状態」(“The State of German Literature”)でそうした捉え方に誤解があることを論証すると、ドイツ文学は再評価され始められたのである。

(3)このような文壇における動向は、1840年にビクトリア女王(Queen Victoria, 1819-1901)がドイツ人のアルバート公(Prince Albert, 1819-1861)と結婚したことにより拍車がかかり、ドイツ文化は進んで好意的に捉えられるようになった。実際、アルバート公が持ち込んだクリスマスツリーの風習はイギリスの家庭で広く親しまれ、世界的に波及していった。

(4)1830年代以降イギリスでドイツ文化を積極的に再評価しようとする風潮は既に複数の研究者によって指摘され、Germanism(ゲルマニズム)と称されることもある。この文化的流入に関する研究は、20世紀前半まで主に個別の著名作家を対象に行われることが多かった。例えば、1920年にWilliam Macintoshが発表した*Scott And Goethe: German Influence On The Writings of Sir Walter Scott*では、ゲーテがスコット(Walter Scott, 1771-1832)に与えた影響が明らかにされている。

(5)20世紀後半になるとこの領域ではより包括的な研究がなされるが、主要な作家に焦点が絞られる傾向は依然として続いていた。アシュトン(Rosemary Ashton, 1947-)が1980年に発表した*The German Idea: Four English Writers and the Reception of German Thought, 1800-1860*は、ドイツ文化の紹介や導入に重要な役割を果たしたコールリッジ(S. T. Coleridge, 1772-1834)、カーライル、ルイス(G. H. Lewes, 1817-78)、エリオット(George Eliot, 1819-80)の4人を取り上げ、彼(女)らの著作物に基づきその役割を詳しく論証している。但し、アシュトンがこの4人を研究対象としたのは、単にドイツ文化の

紹介者としての側面ではなく、カント(Immanuel Kant, 1724-1804)の難解なドイツ哲学がこれら4人のイギリス人作家を通じていかに適切に理解され、広まることとなったかという点を重視してのことでもあった。

(6)19世紀中頃にイギリスの知識人たちの間で盛んに行われていたドイツ文化の再評価や積極的導入は、未だ精査される余地を多く残しているものの、そうした動向が小説や定期刊行物を通じて庶民レベルにも広がっていった経緯を追究することは、同時期におけるイギリス小説の発展を考察する上でも重要である。なぜなら、イギリス小説の勃興と発展は、ワット(Ian Watt, 1917-1999)が『小説の勃興』(*The Rise of the Novel*, 1957)で指摘するとおり、作家と読者が共有していた社会的・道徳的経験の風土に深く関わっているからである。

(7)本研究代表者は、このような観点において重要な役割を果たしつつも調査が及んでこなかった人物として小説家サッカレー(W. M. Thackeray, 1811-63)に着目した。ドイツ語を習得した彼は、ドイツ留学中にゲーテと面会し、その後も頻繁に当地を訪れ、ドイツ文化への興味・関心を様々な形で表わしている。このため、本研究者はまず、彼の代表作『虚栄の市』(*Vanity Fair*, 1847)を含む主要小説7編を精査し、各作品内でドイツ関連の事物がもちうる意義を考察してきた。例えば、『バリー・リンドン』(*Barry Lyndon*, 1844)では物語舞台の約3分の2が18世紀のドイツにおかれ、文化的差異を通じて「紳士」という概念がイギリス特有のものであることや、その普遍的価値を疑問に付す役割をそうした異国の地に担わせていたり、『虚栄の市』では物語のクライマックスシーンがドイツのある街に設定され、主要登場人物が世間体やイギリス的な価値観を脱却し、より合理的思考に目覚め始める姿を印象深く描写していたりする。

(8)これらの研究成果は博士論文としてまとめ上げられたが、サッカレーの伝記的資料を含む全ての著作物を調査した上で研究内容が検証される必要性が残された。故に、本研究では、最初に行うべき課題として、まずは博士論文に集約された研究内容の拡充と論証の緊密性を高め、より完成度の高い一冊の研究書として仕上げることであった。サッカレーによるドイツ関連の事物への言及は、全著作物を調べ上げると膨大な数に上るものの、幸いなことに1997年にプローワー(S. S. Praver, 1925-2012)が*Breeches and Metaphysics: Thackeray's German Discourse* (1997)において、徹底的にそれらを突き止め、彼のドイツ観とその変遷を明らかにしていた。このため、上記の検証・拡充作業はプローワーの研究を参照しつつ、時にはそれに批判的考察を加えながら進められた。

(9)本研究における第1段階の背景は以上

であるが、上記の経緯は第2段階への重要な背景ともなっている。なぜなら第1段階の研究を通じて調査したサッカーなど、19世紀前・中期のイギリス小説家の作品には、冒頭に述べたコツェブー演劇への言及が散見できるだけでなく、他のドイツ人作家ホフマン(E.T.A. Hoffman, 1776-1822)の影響も指摘されているからである。例えば、サッカーの『ペンデニス』(Pendennis, 1848-50)には主人公アーサーがコツェブーの翻案劇『見知らぬ者』(The Stranger, 1789) 原題『人間嫌いと後悔』*Menschenhass und Reue*, 1789)を観劇する場面が示唆的に描かれており、ウォード夫人(Mrs. Humphry Ward, 1851-1920)はエミリー・ブロンテ(Emily Brontë, 1818-48)の代表作『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)に、当時英訳されて雑誌に掲載されていたホフマン作品の影響を指摘している。これら2人のドイツ人作家たち(コツェブーとホフマン)は、これまでの研究で注目されてきた著名なゲーテやカントに比べ、ほとんど調査されていない。このため、本研究では第2段階として彼らの作品がいかにイギリス人作家や一般読者に受け入れられ、イギリス小説の発展に影響を与えているかを追究することとした。

(10)特にコツェブーは、冒頭に書いたとおり、イギリスにおけるゲルマニズム(19世紀中ごろのドイツ文化再評価)を引き起こす要因の一つをもたらした作家であったため、何よりも最初に精査されねばならない。18世紀末から19世紀初頭にかけて彼の翻案劇がイギリスの劇場で、現地の演劇作品よりも多く上演されたものの、イギリスの知識人たちからは酷評を受け、ドイツ文学・文化全般に悪印象を抱かせることとなり、その反動が後のイギリスにおけるドイツ文化再評価の動きへとつながるからである。

(11)先に挙げた「ドイツ文学の状態」にもコツェブーに関する記述はあるが、カーライルが不当な評価より弁護したのは主にゲーテやシラー(Friedrich von Schiller, 1759-1805)の作品群であった。このため、コツェブーの原作や翻案劇に関しては、未だイギリスの知識人たちが下した否定的評価によって漠然と理解されたままなのである。その一方で、イギリスの一般庶民には熱狂的に支持されていた実情を考慮すると、コツェブーの翻案劇については、著名なイギリス人作家たちが残した批評を踏まえつつ、より一般の観客や劇場関係者の声に近い、当時の劇評や記事などを新たに調査範囲に含め検討し直す必要があるのである。これは、演劇と小説というジャンルの違いこそあれ、ホフマンがイギリスの一般読者に与えた影響を調査・研究する場合にも当てはめられよう。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀前・中期のイギリスに見られたドイツ文化の流入と再評価

の動き(ゲルマニズム)を主に庶民的レベルから調査し、当時発展を遂げつつあったイギリス小説への影響を明らかにすることである。従来、ゲルマニズム研究は文豪ゲーテやシラー、哲学者カントなどがイギリスの知識人に与えた影響を中心に考察されることが多かった。しかし、小説というジャンルの発展が一般国民の生活と声に深く関わっていることを考慮すると、ドイツ人劇作家コツェブーの大衆向け翻案劇やホフマンの通俗小説といった大衆文化がイギリス国民に受容されていたことは軽視できないのである。このため、本研究では、これまであまり注目されてこなかったこれらのドイツ人作家による作品が、イギリスの庶民にいかにか親しまれ、浸透していたかを、当時の新聞や雑誌などの定期刊行物を通じて精査し、それらが、同時期に産み出されたイギリス小説の創造にどれだけ貢献しているかを追究する。当時のイギリス国民がよく目を通していた媒体によりアクセスし易くなった現代において、19世紀イギリス小説の諸要素を「ゲルマニズム」という新たな見地から調査し直すことは大変有意義だと考えられるのである。

## 3. 研究の方法

(1)第1段階の研究のための方法は、サッカーが著した主要小説以外の文献資料や彼の伝記的資料を読み込みながら、前述したプロウワーの研究書を参考に、自身がこれまで行った研究の検証と拡充を進めていくことである。これは博士論文を一冊の研究書として仕上げるためにも必要な作業であり、研究結果をより論証性の高いものとして公表することにつながる事となる。

(2)第2段階の研究のための方法は、コツェブーやホフマンの作品を読み込むことに加え、彼らの作品について精査された研究書や論文にも目を通していくことが含まれる。さらには、彼らの翻案劇や小説がイギリス国民にどのように受け止められていたかを知るために、当時の定期刊行物に掲載された劇評や書評をできるだけ多く探し出し、イギリス国内における受容の実態を解き明かしていくことが必要である。後者の文献資料については大英図書館(British Library)のレファレンス・サービスやオンラインデータベース(例えば Nineteenth Century UK Periodicals など)を活用し、効率よい関連資料の収集を図っていく。

(3)上記2点の方法に加え、日々進められていく同じ研究領域の動向や研究方法について常に最新の情報を得るため、国内外の学会にも参加する。そして研究発表や講演を聴講するとともに、他の研究者との情報・意見交換を行っていく。これにより自身の研究の立ち位置や他の研究との関連性を視野に研究を進めていくことが可能となる。

## 4. 研究成果

(1) 博士論文にまとめられた研究の検証と拡充という第1段階の研究成果は、1冊の研究書という形に結実した。博士論文ではサッカーの主要長編小説7編『バリー・リンンドン』、『虚栄の市』、『ペンデニス』、『ニューカム家の人々』(The Newcomes, 1853-55)、『バラと指輪』(The Rose and the Ring, 1854)、『ヘンリー・エズモンド』(Henry Esmond, 1852)、『ヴァージニアの人々』(The Virginians, 1857-59)に見られるドイツ関連の事物が各小説で果たす役割を解き明かし、それらが物語内外でもちうる意義について詳細な考察を加えた。本研究の第1段階ではこの博士論文の各章で得られた結論を再度、更なる関連資料(例えば書簡などの伝記的資料や先述したプロウワーの研究書のような専門的資料)の内容を考慮して、より多角的な観点から議論や論証の妥当性を検討し、これまでの研究をより緻密に補完することができた。

(2) 新たにまとめ上げた研究書では、博士論文の最終的な結論を大幅に修正する必要はなかったものの、サッカーのドイツ文化に対する理解をいくらか改める必要性が生じた箇所はいくらかあった。基本的に、サッカーがドイツ文化を早い段階からより理解しやすい形でイギリスの読者に紹介し、大衆文化への流入に重要な役割を果たしていたという議論には変わりがない。しかし、ドイツ文化に深く根差した重要な概念などについては、彼の理解が十分に及んでいない場合もあったことが明らかとなった。

(3) 例えば、第3章において論じた『ペンデニス』が、レイ(Gordon N. Ray, 1915-1986)の主張するとおり、いわゆるイギリス初の教養小説(Bildungsroman)か否かという問題では、サッカーが「意識的な素質の修練」を意味する“Bildung”の概念を十分に習熟しないまま、教養小説の祖であるゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(Wilhelm Meisters Lehrjahre, 1796)とプロットが酷似した物語を創作していることが論争を引き起こした要因であることが判明した。プロウワーはこのプロットの類似性を重視していたが、ディルタイ(Wilhelm Dilthey, 1833-1911)らによる“Bildung”の定義を丁寧に読み込み、サッカーが『ペンデニス』の序文で表明している人間観などを再考すると、主人公として描かれるべき人物の人間性についての考えが“Bildung”とは大きく食い違っていることが分かったのである。つまり、『ペンデニス』の主人公アーサーは、「意識的な素質の修練」を心がける青年ではなく、環境や欲望に流されてしまう弱い人間であり、サッカーはそうした人間の脆弱性に共感を覚え、それらを描出することが小説の役割であると認識していたのである。

(4) 第2段階の研究に基づいた成果は、2018年度内に刊行予定の研究書に論文とし

て収められる。この論文は「コツェブーの<悪>影響 一八世紀末イギリス劇壇におけるドイツ演劇のカット・イン」と題し、コツェブーの翻案劇がイギリス劇壇に受容された詳細な事情を徹底調査し、これまでの評価を多角的に再検討しながら、そこに潜んでいた数々の問題を解き明かしたものである。

(5) この論文の冒頭では、まずコツェブーの翻案劇がロンドンのコヴェント・ガーデンやドゥルリー・レーン等でどれほど多く上演されていたのかを様々な上演記録を照合しながら割り出している。その結果、1798年10月から1800年2月頃までの間、これら二劇場では、コツェブーの翻案劇が上演された全劇作の約40%を占め、シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)など他のイギリス人作家の作品が上演される機会を著しく奪っていたことを論証している。そして、こうした圧倒的な上演回数と人気ぶりが、現地イギリスの知識人たちの強い非難や脅威を生んでいたことをワーズワース(W. Wordsworth, 1770-1850)らの言説より読み解いている。コツェブー劇のイギリス劇壇への侵出は、一時的な流行では済まされず、イギリスの伝統的な演劇についての誇りと価値指標を大きく揺るがすほどの勢いであったことが分かったのである。

(6) もっとも、コツェブーの翻案劇には適切に批判されるべき問題もいくつか含まれていた。1つ目は、メロドラマ的要素についてである。コールリッジはコツェブーの翻案劇が過度な情緒的インパクトを観客に与えている点を指摘し、そうした「感情の歪みがコツェブーによる現代演劇の特徴」であり、「コツェブーや彼を真似る者たちの茶番じみた悲劇やお涙頂戴物の喜劇に押し掛ける観客たち」に、侮蔑を込めて「喜劇を求めているのか」と非難している。2つ目はコツェブー劇の内容が孕む不道徳性についてである。スコットはコツェブー劇の「最も明白な欠点は、その作品が我々に差し出す風紀を乱すような物語描写の虚偽」であり、「不道徳な者が、非難の対象というよりは同情の対象として頻りに描かれ、時には彼らが模倣や賞賛の対象として選ばれている」と批判している。これらを見てくると、コツェブーの翻案劇はイギリスの演劇界や文芸文化、延いては社会にまでいろいろと好ましからぬ影響を与えた通俗劇として評価が定まっていると理解できよう。実際、こうした評価はそのまま現代でも定着していることが文学辞典のコツェブーに関する説明などより確認できるのである。

(7) しかし、そうした定評はイギリスの知識人たちによる評価を踏まえている可能性があり、コツェブー劇とそれがイギリスに与えた影響は、より柔軟で多角的な観点から検討される必要がある。コツェブー作品に真っ向から鋭い苦言を呈したイギリス文人たちではあったが、彼らの論評にはその翻案劇が

なおも自国で人気を博し、好んで上演されている理由が国内的にほとんど説明されていなかったのである。このため、本論では、コツェブー劇が不道徳的内容を孕みつつ、なおもイギリスの舞台で爆発的人気を博した要因を、原作と翻案のテキスト、当時の劇評や劇壇の諸事情を調査しながら解き明かしている。

(8)コツェブーの翻案劇が不道徳的内容を孕みつつイギリスの劇場では頻りに上演されていたという問題は、『見知らぬ者』が上演される経緯や劇評を調査することで読み解くことができた。この翻案劇の内容は次のとおりである。女主人公アデレイドはある男性に誘惑され、夫チャールズと二人の子供を捨てて出奔するも、それを後悔して男と別れ、ヴィンターセン伯爵夫妻の下でハラ 夫人と名前を変えて暮らしていた。妻に逃げられた夫は人間嫌いに陥り、正体不明の「見知らぬ者」として伯爵夫妻の邸宅近くにある小屋で生活していた。

(9)『見知らぬ者』の主題は、不貞をはたらいた妻を許せるか否かというものであるが、妻に再会した夫は最終場面で現世ではそれは難しいと伝えるも、別れ際に子供たちが現れ、感動的な再会に感極まると、再び熱い抱擁を交わして閉幕となる。夫が妻を許したか否か、また、その後の二人の行く末については観客の判断に委ねられているが、原作の『人間嫌いと後悔』では、「許すよ、お前」というマイナウ(チャールズ)の台詞で終わっている。

(10)初演後間もなく掲載された劇評には『見知らぬ者』のモラルが「疑いなく如何わしいものであり、それが不貞行為を本来よりも忌まわしくないもののように見せてしまいがちになることを恐れる」と懸念を表明する。また、「簡単にそして半分自ら望んで誘惑の犠牲者に落ちた妻であり母である者が、夫と子供のもとへ戻るところを描くのは危険である」厳しく非難している。このため、コツェブーの翻案劇に道徳的問題があったことは明白である。しかし、それらがイギリス社会にモラルの弛緩を招き、きわどい道徳的問題を観客に突き付けたため、皮肉にも作品のインパクトや話題性が生まれた可能性が浮かび上がってくるのである。

(11)実は、こうした「悪」影響は、原作の『人間嫌いと後悔』を翻案する過程で、シェリダン(R. B. Sheridan, 1751-1816)率いるドゥルリー・レーンの劇場経営者たちによって密かに意図されたものであったことが判明した。『人間嫌いと後悔』は最初1793年ジョージ・パーペンディックによって「忠実に」英訳されたが、その後、A・S・シンクによってイギリスでの上演に相応しい形に書き換えられた。この版では、原作のオイラーリアに相当するスミス夫人は、夫を捨てて出奔するものの、彼女を誘惑した相手とは一線を越えず、すぐに引き返して自身の愚かな過ち

を悟り、その後は後悔の念を抱きながら生きていたこととなっている。この「自由訳」は1797年に創作され、ドゥルリー・レーンの劇場経営者たちへと送られたが、成功の見込みがないと判断され10日程で返却されたという。しかし、彼らはドイツ文学に造詣の深かったベンジャミン・トンプソンを起用し、約1年後に同じ原作を『見知らぬ者』として上演し始めた。トンプソンの翻案はシンクと同様の省略や改変はあるものの、彼が書き換えた女主人公オイラーリアの罪については原作と同じ設定のままであり、最終場面のみが(9)で見たとおりに巧みに変更されている。2つの翻案を比較したマイロン・マトローは、シンクの翻案は今日(1960年代)でもイギリスの読者によく読まれていたであろうが、トンプソン翻案の方が、「より煽情的で道徳的に不快」ではあるものの、「上演においてはより効果的であった」と考察しているのである。

(12)コツェブーの翻案劇がイギリスで人気を博した原因は、それらが、原作にあるとおり普遍的な人間性を自然な感情で描き、物議を醸すような道徳的問題を孕んでいた点にあったと言えよう。しかし、その圧倒的な人気は原作にのみ起因したわけではなかった。原作がイギリスの舞台で上演されるまでには、まず翻訳と文化的差異を考慮した脚色が介在していたのである。このため、本論では次にそうした翻案がいかにコツェブー劇の人気を後押ししたかを精査している。

(13)『ピサロ』(Pizarro, 1799) 原題『ペルーのスペイン人』*Die Spanier in Peru*, 1796)がイギリスで爆発的な人気を博したのは、シェリダンによる創造的な翻案に負うところが大きかった。この原作には当時有名なルイス(M. G. Lewis, 1775-1818)による翻案があったものの、彼はアン・プランプトリの英訳を参考に、場面や台詞を削ったり縮めたりしただけでなく、よりインパクトを高めるための書き換えや脚色を多く施している。

(14)セシル・プライスは、シェリダンが「高度に練られた演説的效果を出すために」翻訳の台詞を「気持ち高め、バランスを保ち、詩的なものになっていく」ように書き換えているという。初演翌月の『マンスリー・ミラー』は、原作との詳細な比較に基づいた翻案の評価を載せ、シェリダンが「原作の感情をほとんど拒まず、それらを最高の繊細さと美しさで頻りに増幅し、彼自身の豊かな知性から、ドイツ人作家に特有の簡素さへの好み不完全あるいは曖昧にしているところを補っている」と称賛する。

(15)しかし、このように舞台上での出来栄を意識したシェリダンの翻案は、狙いどおり興行的成功を導いた一方で、戯曲としての完成度や原作がもつ特質の保持という点においてはやや問題があった。つまり、脚色された雄弁な台詞も時には大袈裟すぎる表現として捉えられ、韻文体と散文体の混在が

言語表現の不均衡を招き、観客に落ち着きのない感覚を与えることもあったのである。トマス・ムアは「書かれている文体が韻文にも散文にも属さず、ある種両方の性質を持ち合わせ、優雅に前者の要素へ円滑に移行するのでもなければ、着実に後者の要素で進むわけでもない。言語に華やかさを与えようと、韻を踏ませるために倒置が代用され、詩の最悪な一要素である余分な形容語句が、調和さえあれば容認できるものを、それすら無く採用されている」という。これらを考慮すると、コツェブー劇はイギリス人劇作家たちによる創造的な翻案により劇場での効果は高められたものの、原作がもつドイツ語本来の演劇的效果や芸術的価値が軽視された可能性が否定できないのである。ここにもまた、劇場での人気と作家たちからの酷評が併存する要因の一つを認めることができよう。

(16) コツェブーの翻案劇がイギリスの舞台で大成功を収めた背景には、上演時に付加された演出と人気俳優たちの好演も大きな要因となっていた。『マンズリー・ミラー』(1798年4月号)に掲載された『見知らぬ者』についての劇評は、冒頭コツェブーが感情豊かな人の心をつく劇作家であることを評価しつつも、作品内容については終始厳しい批評を展開し、最後の3段落でイギリス人俳優たちの演技に賛辞を贈っている。それは「たとえ功績がほとんど目立たなくとも、演技だけが、それ〔『見知らぬ者』〕を有名にしていよう」という一文で始まり、まずは主人公の「見知らぬ者」を演じたケンプル(John Kemble, 1757-1823)の演技を「秀逸の演技」と絶賛している。

(17) 『ピサロ』も同様にイギリス独自の壮大な音楽と歌などによって演出され、俳優たちの好演も注目を浴びていた。ケンプルの演技については1800年1月号の『マンズリー・ミラー』に「ケンプル氏のロラについて」という特集記事まで掲載され、詳細な分析に基づいた好意的評価が綴られている。主人公ロラのスピーチや軍隊の行進などいくつかの重要な場面には、イギリスで独自に追加されたコーラスや音楽が添えられ、聴覚的印象も高められていた。『ピサロ』の音楽はシェリダンとも深い親交のあった、元テナー歌手のアイルランド人作曲家マイケル・ケリーによって作られ、1799年に『ピサロの音楽』という楽譜も発売されている。

(18) このように、コツェブーの翻案劇は、イギリスの舞台でのみ付加された上演時の演出や有能なイギリス人俳優たちの好演によっても盛り立てられていたと理解できる。いくつかのイギリスの定期刊行物は、自国の文化的資産に対する誇りも相俟って、これらを原作の物語内容よりも好意的に評価することが多くあった。加えて、当時の観客たちの嗜好や鑑識眼に少し変化が見られ始めていたことも考慮せねばならない。L・F・トンブソンはコツェブー劇の多くが、歌の導入

によって「オペラ的なスペクタクル」で扱われていたと紹介し、次のように言う「当時のイギリス国民は、演劇においては、均一性ではなく多様性を求め、最も成功した上演は、悲劇、喜劇、音楽、ダンスを巧みに融合させたものであった。演劇のスペクタクル性は、イギリスでは伝統的に一定の評価をされており、コツェブーの翻案劇上演に際しては、さらに効果的な複合的要素が加わり、イギリス人観客もそれらを積極的に楽しむようになっていたことが窺えよう。

(19) 以上を見てくると、コツェブーの翻案劇の人気ぶりはイギリスの舞台を席卷しかねない勢いであったため、鑑識眼のある批評家や知識人たちは、それが大部分同国人によって引き起こされた現象であったにもかかわらず、その元凶を他国(ドイツ)の劇作家が創作した作品にのみ起因すると捉え、強く非難したと考えられるのである。ここには、イギリス人が誇りをもって受け継いできた伝統的演劇作品が他国原作の翻案劇に押しやられた現状に対する焦燥と危機感もあったと言えよう。また、同国の観客の好みも、高い芸術性と文芸的趣味を帯びた作品から、心理的・視聴覚的インパクトや娯楽性をもった作品へと向き始めていた実態を把握しきれなかったこともその一因であった。これらは、翻って見れば、当時低迷していたイギリス演劇の問題を浮き彫りにしている。一国の枠内での伝統的な文学的価値指標のみでは、常に変化や目新しさを求め、多様化する観客の要求に応えきることが困難になり、新たな刺激を提供できなくなっていたと解せるのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計 2 件)

市橋孝道 他、英宝社出版、「コツェブーの<悪>影響 一八世紀末イギリス劇壇におけるドイツ演劇のカット・イン」、『新・阪大英文学会叢書(若手編)』、2018(刊行予定)、掲載ページ・総ページ数未定

市橋孝道、新潟大学大学院現代社会文化研究科、*The German Code in Thackeray's Major Works*, Niigata University Scholars Series Vol.14, 2014, 180

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

市橋 孝道 (ICHIHASHI, Takamichi)  
新潟大学・教育研究院人文社会科学系・准教授  
研究者番号：70613397